

F-45

地域との関わりに着目した“瀬戸内国際芸術祭”展示作品とプロジェクト 芸術祭の会期外に着目して

The Relationship With the Community Works and Projects Featured at Setouchi Triennale Focusing on the off-season

○山内慶吾¹, 天野光一², 西山孝樹²*Keigo Yamauchi¹, Koichi Amano², Takaki Nishiyama²

Setouchi Triennale is an international art festival that is held every three years on the various islands of the Seto Inland Sea in Okayama and Kagawa Prefectures. The first event took place in 2010, and the fourth in 2019. This paper focuses on works and projects that are part of the permanent collection exhibited off-season among those that are featured during the Triennale. Using the KJ method, the present study categorized the types of relationships each work and project have with the community.

1. はじめに

瀬戸内国際芸術祭は、岡山県および香川県に点在する瀬戸内海の島々において、3年に1度開催される国際芸術祭である。本芸術祭は、2010（平成22）年に初めて実施され、2019（令和元）年の開催は、第4回目の開催年である（Table.1 参照）。

2. 研究方法

そこで本稿では、瀬戸内国際芸術祭における展示作品のうち、1章で示した会期以外においても展示（常設展示）されている作品やプロジェクト、82件を対象とした。なお、2019（令和元）年から、新たに展示された作品および本年度をもって作品が撤去される作品については、Table.1で示した会期以外で常設展示されるかどうかは未定であることから、研究対象からは外すこととした。

3. 研究結果

本稿で研究対象とした82件について、Table.2で示した5項目に分類することができた。

(1) 「体験」を伴う作品・プロジェクト

来場者が、何かしらの「体験」を伴う作品・プロジ

ェクトが多くあった。

『大島に行こう！アートと自然を楽しむ子どもキャンプ』は2014年から毎年開催されており、瀬戸内海の大自然を3日間のキャンプを通して体験できる（Table.2 (1) a. 自然を感じる作品・プロジェクト）。

『ストーム・ハウス』という作品では、視覚をできる限り遮り、神経を聴覚のみに集中させることで稲光や雷鳴を体験できる作品がある（Table.2 (1) b. 音を感じる作品・プロジェクト）。

『伊吹島ドリフト伝説』では、映像を観から島特有の路地を原付バイクにまたがり探索する体験ができ、島の歴史や街並みに触れることができる（Table.2 (1) c. 映像を楽しむ作品・プロジェクト）。

『村尾かずこ漆喰・鰻絵かんばんプロジェクト』では島の昔話を聞き取り、それらを図案化して絵看板にしたものを島内の店や民家の軒先に設置した。看板を作成しながら島に関することを学ぶ（Table.2 (1) d. 映像を楽しむ作品・プロジェクト）。

その他にも、『薫風の舞』では直島において、江戸時代から伝わる女文楽を体験することができる（一度は失われかけていたが、地元有志で伝統を復活させ、作品の1つに数えられるようになった（Table.2 (1) d. 学ぶ作品プロジェクト）。

(2) リノベーションを実施した作品

島々に残る建築物等を大幅に改修して作品を展示するものである。

『直島銭湯『I湯』』では、地域住民や来島者などが関係なく入浴ができる。平凡な銭湯であったものを来島者と地域住民を繋ぐ作品へと、地域に親しまれやすい作品と生まれ変わった（Table.2 (2) b. リノベーションにより地域住民と来島者とのコミュニケーション

Table.1 これまで開催された瀬戸内国際芸術祭の概要

	開催年	会期（括弧内は開催日数）	来場者数
第1回	2010年	7/19～10/31（104日間）	938,246人
第2回	2013年	春：3/20～4/21（32日間） 夏：7/20～9/1（44日間） 秋：10/5～11/4（31日間）	1,070,368人
第3回	2016年	春：3/20/17（29日間） 夏：7/18～9/4（48日間） 秋：10/8～11/6（29日間）	1,040,050人
第4回	2019年	春：4/26～5/26（30日間） 夏：7/19～8/25（37日間） 秋：9/28～11/4（37日間）	386,909人 （春会期のみ集計）

1：日大理工・学部・まち，2：日大理工・教員・まち

が図られている作品)。

(3) 地域住民と来島者のコミュニケーションを図るプロジェクト

『島のお誕生会』は豊島で毎月実施しており、島の人と来島者が一緒になって誕生日をお祝いする場となっている。また、来島者も自由に参加ができ、事前に予約をしておく地域住民の方々がお祝いをしてくれる (Table.2 (3) 地域住民と来島者のコミュニケーションを図るプロジェクト)。

(4) 人々が日常的に使用している作品

島民や来島者が、日常生活を営むうえで必要不可欠な施設等が該当した。それらは、本稿で対象とした芸術祭開催前から既に公共施設等で活用されていた施設に芸術性が付加された作品と芸術祭の開催を契機として新たに建設された公共施設の2通りが存在した。

『護王神社』では、境内にある石室と本殿がガラスの階段で結ばれ、作品の1つに位置づけられている (Table.2 (4) a-1. 日常的に使用されている建築物)。

JR 宇野みなと線沿線にある4駅 (常山駅, 八浜駅, 備前田井駅, 宇野駅) では、各々の駅舎やホームごとに装飾され作品として楽しむことができる (Table.2 (4) a-2. 日常的に使用されている土木構造物)。

そのほかにも、男木島の『路地壁画プロジェクト wallalley』では、景観を崩さないように島内で集めた廃材を民家の外壁に設置した作品も存在する。

豊島美術館は、2010 (平成22) 年、第1回瀬戸内国際芸術祭の会期中に開館した (Table.2 (4) b-1. 芸術祭を契機として新規に建設した建築物)。

高松市、竜王山の山頂にある『Watch Tower』からは、作品と共に美しい瀬戸内海の風景を俯瞰して眺めることができる (Table.2 (4) c. 芸術祭を契機として新規に作成した視点場)。

(5) 展示物の機能のみを有する作品

瀬戸内国際芸術祭を目的として、各島を訪れた来島者が芸術作品として鑑賞するものである。地域をモチーフとする作品や背景に見える美しい景色と共に作品を鑑賞できるものがある。

『舟底の記憶』では、本芸術祭が開催されている瀬戸内海沖で海底に沈んでいた旧日本軍の戦艦のいかりなど2点を作品化した。表面の腐食や付着物などが時間の経過を物語り、作品鑑賞時には瀬戸内海の美しい風景と共に鑑賞することができる。 (Table.2 (5) a-2. 地域性をモチーフにした作品 (地元以外の材料を使用))。

Table.2 本稿で対象とした作品およびプロジェクトの分類

項目		合計	
(1) 体験を伴う作品	a. 自然を感じる作品・プロジェクト	4	
	b. 音を感じる作品・プロジェクト	2	
	c. 映像を楽しむ作品・プロジェクト	3	
	d. 学ぶ作品・プロジェクト	6	
	e. その他	3	
(2) リノベーションを行った作品	a. リノベーションを行ったのみの作品	9	
	b. リノベーションにより地域住民と来島者のコミュニケーションが図られる作品	4	
	c. 地域住民と共にリノベーションを行った作品	2	
	d. 有名建築家がリノベーションを施工した作品	1	
(3) 地域住民と来島者のコミュニケーションを図るプロジェクト	3		
(4) 人々が日常的に使用している作品	a-1. 日常的に使用されている建築物 (もともとあるものに手を加えたもの)	4	
	a-2. 日常的に使用されている土木構造物 (もともとあるものに手を加えたもの)	2	
	a-3. 日常的に使用されている公園 (もともとのもに手を加えたもの)	2	
	b-1. 芸術祭を契機として新規に建設した建築物	12	
	b-2. 芸術祭を契機として新規に建設した土木構造物	2	
	b-3. 芸術祭を契機として新規に造成した公園	1	
	c. 芸術祭を契機として新規に作成した視点場	3	
	(5) 展示物の機能のみを有する作品	a-1. 地域性をモチーフにした作品 (地元の材料を使用)	4
		a-2. 地域性をモチーフにした作品 (地元以外の材料を使用)	8
b. 地域性をモチーフにしていない作品		5	
c. 環境を題材のしたもの		2	

直島の『赤いかぼちゃ』で用いられている赤色は、太陽を意味しているが、展示されている直島に関連する文化などをモチーフにしたものではない (Table.2 (5) b. 地域性を取り入れたモチーフにしていない作品)。また、著名な草間彌生によるものであり、来島者を引き付ける魅力がある。

そのほかにも、『淀川テクニク』では周辺で採取したゴミや不用品を集めて、作品が制作され、海の環境問題に着目した作品である (Table.2 (5) c. 環境を題材のしたもの)。

4. まとめ

本稿では、瀬戸内国際芸術祭が開催される地域において、芸術祭の会期以外での関連する作品やプロジェクトが、どのように地域と関わりを持っているかを整理した。島民や来島者が日常的に使用する公共施設に芸術性を取り入れたものが多かった。島々を中心として、何かしら地域住民や文化などと交わる作品やプロジェクトが多く、何ら関係しない作品は非常に少ないことがわかった。

5. 参考文献

[1] 北川フラム・瀬戸内国際芸術祭実行委員会: 『瀬戸内国際芸術祭 2019 公式ガイドブック』, 美術出版社, 286p, 2019.